

くまがや風土記 5 秦村の由来について

熊谷市史編さん室 水品洋介

明治維新をむかえ、新たな時代の変革が幕開けするなか、妻沼ではどのような変遷をたどり、近代化していったのでしょうか。明治から近代に至るまでの町村合併の変遷を旧妻沼町域中心に確認していきたいと思います。

旧妻沼町全域は、明治4年(1871)11月に入間県の管轄になるまでは煩雑でした。その後、明治6年(1873)6月に入間県は熊谷県となり、明治9年(1876)8月に埼玉県に編入以降、現在も続きます。

旧妻沼町域の28ヶ村は、明治22年(1889)の町村制施行により幡羅郡太田村、秦村、長井村、男沼村が合併して成立、妻沼村、弥藤吾村はそのまま変わらずの計六ヶ村になりました。妻沼村と弥藤吾村は合併せず、妻沼村外一ヶ村組合を設置して行政事務を共同処理していました。明治29年の郡統廃合に伴い大里郡、幡羅郡、榛沢郡、男衾郡は廃止され、新たに大里郡が置かれます。町村制施行では合併しなかった妻沼村、弥藤吾村も、大正2年(1913)に合併して妻沼町となります。昭和30年(1955)、妻沼町と男沼村、太田村、秦村、長井村の一町四村が合併して新たな妻沼町が成立しました。その後、平成17年に妻沼町は熊谷市と合併して今日に至ります。

では、今回は町村制施行により、新たな名称として成立した秦村の村名由来について紹介していきたいと思います。

秦村は、明治22年に葛和田村、弁財村、俵瀬村、日向村、大野村が合併して成立しました。大野村は、明治16年葛和田村より分村して成立した新しい村です。この五ヶ村は、明治18年から葛和田連合戸長役場で行政事務を担っていた村々です。そうしたなかで、町村合併に際して明治21年6月、内務大臣訓令により町村合併が推進されました。内務大臣訓令第六条には、合併の町村は新たにその名称を選定すること、旧町村の名称は大字として残すこと、大町村に小町村を合併するときは大町村の名称を新町村の名称とすること、互いに優劣のない数町村が合併するときは参互折衷するなど事情をくみとり民情に背かないこととあり、これが町村名称の前提にありました。

大里外三郡長の計画によると、当初は葛和田連合戸長役場管轄区域の葛和田村、日向村、俵瀬村、大野村、弁財村の五ヶ村を合併して、新たな「葛和田村」とすることとしました。この諮問に対して関係者は協議を行い、合併には同意しましたが、新村名の件は、「各村ハ各自ノ私見ヲ吐露シ論種尽クルノ期ナク」として日向村外三ヶ村は、幡羅郡の東部で往古から当地方を「秦郷」と称して

いたのが古書にされているので、その名称を村名としたいと郡役所に上申しました。一方、葛和田村は諮問案通り「葛和田村」と命名するよう上申しました。

ここでいう古書とは「和名類聚抄」のことです。「和名類聚抄」は、源順が撰進して、承平年間（931 - 938）に成立したといわれる我が国最初の分類体の辞書です。部類別で項目があり、その中の国郡部の項に幡羅郡の地名があります。

幡羅郡は上秦、下秦、廣澤、荏原、幡羅、那珂、霜見、餘戸（高山寺本のみ「餘戸」なし）があり、この「上秦」を根拠に村名の上申を行いました。葛和田連合戸長（当時船田三千雄）は、村名改正のため差支えが生ずるのはよくない、公平の眼を開いて部内各村の意見のあるところを推察、勝手理屈の範囲ではいけないとして、新村名を「秦村」とした日向村外三ヶ村を公平としました。

一方、葛和田村の主張は「之ヲ拒ムハ所謂勝手理屈タルノ範囲ヲ出ツル能ハサルモノニシテ決シテ与論ノ故ナラサル所ナリ」として却下され、「秦村」としたいと郡長に上申しました。

郡長は古書によって「上秦」又は「秦郷」と称したことを調査し、さらに連合戸長の意見を尊重しつつ各村公平の原則にたつて旧各村名に関係のない名称を附することが妥当であると思考して、「秦村」と命名することが決定しました。

最後に、「秦村郷土誌」（謄写版）の郷土の沿革によると、秦村は「和名抄所載合郷七并余戸ニ上秦下秦トイフ地名アリ、此地上秦カ下秦カ詳カナラザレドモ古来波多ト称シ、現今ハ利根川ノ瀬変遷シテ対岸上野国邑楽郡舞木村ニ波多八幡社アリ、本村名ヲ秦ト命名シタルトモ之ガ為メナリ」とあります。当時から「秦郷」の区域は不詳な点が多いものの、日向村外三ヶ村は、この幡羅郡にある地名を根拠に新たな村名を創出しました。

このように明治 22 年の町村制施行に伴い、新たな村名を創出した村の一つとして秦村は成立しました。迅速に村名を決定して、民意を尊重した地域の方針が各所にみられていく中で、20 世紀をむかえていくことになります。

（熊谷市公連だより 第 16 号 平成 25 年より）

- 参考文献：『埼玉縣市町村 合併史』下巻
『埼玉県地名誌』葦塚一二郎著
『和名類聚抄郷名考証増補版』池邊彌著
『熊谷市史』資料編 2 古代中世本編